

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第4回）「体力の向上」部会 要点録

開催日時	平成21年8月25日(水) 午後3時30分～午後5時30分	
会場	練馬区役所東庁舎3階 301号室	
出席者	委員	米津光治、杉原 昇、内田秋男、宮野いずみ、工藤智昭、本間章郎、畑 陽子（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	渡辺浩一 指導主事

1 挨拶

部長

今日の部会は、前回の宿題になっていた目指す子どもの姿について、お互いに情報交換をするということで、協議を深めていってほしい。

アドバイザー

いよいよ具体的な資料をもとに、練馬区の小中学校が目指す子どもの姿を明らかにしながら、課題となる項目、具体的な方策を検討していかなければいけない時期になっている。小中一貫教育ということで校種の違いを越えて、よい資料ができればいいと思っている。

事務局

事務局から前回の要点録の確認。前回、練馬区の体力の位置付けに沿ったかたちで扱うことで方向性が持てた。今後取り組んでいく方向として、体力の位置付けをもとに授業による体づくり運動等を具体化、計画を立てていくことや、部活動の取り組みなどにも話が及んだ。Ⅰ期からⅢ期の目指す子どもの姿を、本日の会で協議を図っていただきたい。

2 協議

委員

はじめに資料のほうの説明をしていただきたい。

委員

これは、新しい学習指導要領の捉え方での目標なのだが、発達段階で高校まで4・4・4という捉え方。本部会では中学校までの4・3・2について検討するが、この資料を参考にしていったらどうか。今回の学習指導要領は、各運動領域が体系化されているところが大きな特色で、それを押さえて、1～4年では、運動場面でいろいろな遊びを通して楽しく運動をすることが目標。小学校高学年と中学校1、2年生では、それぞれ運動の特性にふれる楽しさを経験させてあげること。そして中学校の3年生からは選択制等が入ってくるので、自分の力に合わせながら得意な運動を作る。小中高を通してこんな目標の押さえ方ができるのではないかという資料。それからスキヤモンの発育発達曲線。子どもたちの発育を押さえて、これから話し合われる体づくり運動の参考までに。3番目は年齢と体力の関係で、15歳ぐらいまで高める努力

をしたあと、どう維持していくかという資料。だから基本的な生活習慣、食育、保健にかかわる部分も入れて幅広く、行動体力だけではなく防衛体力も加味しようということ。

委員

基本的に新学習指導要領に書かれている文言を整理した。それから東京都小学校体育研究会のときに白旗和也先生からいただいた資料をもとに、その区分やポイントなども分けた。

重視する指導項目を太字で強調した。Ⅰ期では体力の向上を直接のねらいとせず、運動や遊びを通して、基本的な動きを総合的に身につけられる子どもを目指していく時期ではないか。各期の一番上の段が運動、真ん中が態度、一番下段が思考判断。Ⅱ期は、体育科全般として多くの領域の運動を体験する時期と捉え、自己の健康や体力の状態を知って必要性を理解し、ねらいを持って運動できる子どもを目指す。右側では体力要素。巧みさや柔軟性を高めるための運動を行うことがポイントになる。あとは運動、態度、思考判断については新学習指導要領のものを載せてあるが、各期によって内容が変わっている。Ⅲ期は、私も高校までを4・4・4に分けられている資料も参考にした。時期としては、多くの運動を経験するのは中2もかかっている、中3から高校は、一つのスポーツに親しむ時期という捉え方だったので、うまく整理できなかった。求められている子ども像も多少変わって、自らプランする、マネジメントしていくという内容が目指す子ども像でも入ってくると思った。

委員

Ⅰ期は楽しく運動する、運動感覚を育てる、基礎的な動きを身につける、あとは協力、公正な態度を身につけてほしい。Ⅱ期で重視したいのは運動の特性。運動の特性に応じた楽しさを味わうと共に、味わうための技能を身につけること。それから自分の体に関心を持って、計画的に体力を高めようとする。あとは、日常生活で自分に合った運動に取り組む出発点の時期。これはⅢ期につながる。それから、健康面、保健面も含めた専門的な知識を日常に生かす力をつけてほしい。Ⅲ期も、やはり運動の特性にふれた上で、継続して行う習慣を育てる。そして自己に適した運動を計画して、課題を解決するために自分の不足しているところを練習で補いながら、運動する楽しさを味わって幅を広げる。それから最終的なところで、体力を高める計画を立て、日常生活の中でも実施して体力向上を図っていくことが生涯体育とつながっていく。そういう子どもが育ってくればいいと思っている。

委員

Ⅰ期では、やはり基礎的、基本的な動作を習得する。特に発達的に幼児期の動きですごく差があるので、遅れを取り戻す時期でもある。その中で基礎、基本的な動作を習得させる繰り返しの動きをやっていくことが必要なのでは。運動が好きになることがⅠ期では必要。

Ⅱ期は、基本的な動きを組み合わせることに適した時期で、走って跳ぶなどの動きをたくさん経験して、運動の特性の楽しさや喜びを味わう時期。特に運動神経も伸びる時期なので、ここで特性に触れるということがすごく大事だ。Ⅲ期は、一つの運動を選び、継続することができるようになる時期であり、運動が得意になるということだと思った。体力向上に向けてさまざまな経験が必要だとあったので多少違っている。

委員

I期からⅢ期までキーワードを二つずつ読み上げていく。I期。基礎・基本を学ぶ。また、運動を楽しむ。Ⅱ期。各領域の運動を学ぶ。自分に適した運動を探る。Ⅲ期。習熟を深める。専門化を図る。

委員

小中共に運動に親しむ機会を阻害しているところがある。小学校では、4年生ぐらいから塾に通う子どもが多い。それから中学校では、中3になると部活動を引退し、運動する時間が減ることが予想される。

学習指導要領の4・4・4と小中一貫の4・3・2の分け方の捉え方は、現場ではどうか。

委員

今の中1、中2の関係から言って、それぞれの機能、発達段階の体力的なところの課題、問題点はどうか。中1、中2はかなり体力差がある。小学校と、中学校の伸び率の差は運動能力面も体力面もかなり違うのではないか。

委員

体力テストの結果から、中1、中2、中3というのは、学年が上がるごとに体力面は増していく。区分の仕方は、私も答えが見つかっていない。ただ、部活動に関しても男女を問わず、3年になるほど運動能力のパフォーマンスは上がってくると考えている。

委員

中3は受験があって、部活動はほとんどが夏の大会で引退していくので、今はほとんど活動をしていない生徒が多い。

委員

普通の生活の中でどれだけ運動ができるか。中学校の体力的なこと、1年生は、つまずいて倒れて手をついて指を骨折するような怪我が多い。2、3年生になると、体力もできて骨格や筋肉もしっかりしてくるから、少なくなる。小学校はどうか。

委員

例えば1年間をかけて中学校のスタイルに慣れて、いろいろな素地が備わって中2で伸びていくのか、もともと人間として育ちのベースがそういう成長になっているのか分からない。だから、この区分けでⅡ期まで小学校で教えて小学校スタイルでやって、中2で今の中1と同じレベルになるのであれば、学校のシステム上の体力向上がうまくいっていないのかもしれない。逆にこのシステムで、中2で対応できれば、本当の体力の伸びだと思う。

中1問題とよく言うが、ここは一緒になっているので、その難しさもある。あとはI期でも、1、2年と3、4年は全然違うので難しい。Ⅱ期で5、6年に中1を合体する意味がどうか。中2、中3はあまり差がなければ、Ⅲ期ではかなりの目指す児童像がねらえると思う。

委員

Ⅱ期は、小中のギャップをできるだけ薄める意味合いで括っているのではないかと。

委員

最初からほかのキャリア教育等の領域も全部同じ括りだ。その一律に区切った理由がはっきりしないと、強引に押し込めた感じになりかねない。指導要領が高校までを見通した5、6、1、2まで入っていて、あえて2年生をⅢ期に入れ、ほかの領域と同じ区分けで小中一貫の9年間でやるのであれば、体育が違う区分けなのは大きい。どういう経緯なのか。

事務局

今、小中一貫で広く行われているのがこのタイプの区切りだということで、本区もそれに準じている。体育に関しては、指導要領の区分けと差があるのでジレンマがある。体力面で見た場合に、中1と中2の子の差は、体力面でも体格面でも非常に大きいので、指導要領とは異なるが、Ⅲ期の中で目指す子どもの姿が求めているらと思う。

委員

Ⅱ期の小学校4、5、6年生あたりの課題はあるか。女子はたぶん、いろいろな意味で男子より早い。小4、5、6年生ぐらいは体格にしても男女変わらない。課題は何か。

委員

体育の授業で言えば5、6年まで男女一緒にやる授業が、中学になると別々になる。そうすることで授業のやり方が変わってくる。トレーニング的なことが入ってくるので、戸惑う児童も出てくるのでは。6年で男女一緒に授業だと、ボール運動をやらせたら男子が圧倒的に有利。一緒にやるとなると、男の子を諭して目指すところを技術レベルではなく、チームワークにもっていく。ところが中学に行くと男子だけで集まれば、やはり授業の質も違う。6年生の男女別で、同じ運動でも内容を変えると技能水準がかなり変わる。

委員

体格面では、一般的には男子より女子のほうが発育が早いと言われているが個人差がある。あと、ちょっとつまずいて骨折をするという話もあったが、それも運動経験の差で、経験が少ない子はやはり怪我をしやすいし、日頃から運動をしている子は怪我をしづらい。突き詰めていくと二極化になる。中学校へは、運動経験の差異をそのまま引きずって上がっていく。大きな違いは、体育の学習の進め方ややり方。Ⅱ期の小6と中1のつなぎの部分がどれだけスムーズに接続するかがすごく大事。だからここで一般化して考えることが大事になる。

委員

中1で入学してきて、授業の形態が違って、子どもたちはあまり戸惑わないで体を動かすことができる。ただ、入学してきた4月から1カ月ぐらい集団行動の時期に入るので、そこで徹底して行っている。最初は戸惑うこともあると思うが、全体的には特に困っていることはない。2点目の学年が上がるごとに運動能力の二極化は非常に感じる。年々ひどくなっている。

事務局

Ⅱ期の扱いだが、指導者はT・Tのようなかたちで小学校の授業に中学校の先生が入ったり、その逆もあるというかたち。兼務はしない。それから、5、6年生の教科担任制についてはまだ具体的に進んではいない。一つの選択肢であることは確か。

委員

男女共修の話があったが、中学でもやる。個人種目とか陸上競技であれば技量が違って同じことはできる。それからバスケやバレーも、グループ学習として可能。だから、小中一貫の流れの中で、小学校でやってきたものが中1、中2でうまく流れていけるかもしれない。

アドバイザー

今も指摘があったが、教科担任制も含めて体育・保健体育の授業のあり方みたいなどころまで、体力向上の部会として踏み込むのかどうか。授業のあり方や学習形態を入れていくのか。例えば工藤先生の表で言うと、イ、ウ、エ、オに何が入るのか。体力向上であれば、ここに生活習慣や食育的なことが入って表が完成していくと思う。やはり体を動かしていれば、それは自然と体力の向上につながるが、大事なことは「楽しく」ということ。楽しいと自ら進んでやる気を持って運動に取り組む。授業だけではなくほかの場面でも楽しく運動できることが大事だということを、どう具現化するかという資料が必要。あまり授業の中身とかカリキュラム的なところには踏み込まないほうがいい気がする。

事務局

本日の話し合いの軸は、児童像。意見に共通して入っていることを大枠として共通認識ができれば、新たな視点として埋まっていくと思う。そういう視点で資料を拝見すると、Ⅰ期のキーワードは「楽しむ」。力いっぱい運動する楽しさを味わう。それを通して運動の基本的な動きを身につけていく。Ⅱ期は、それを土台にしていろいろな運動種目を实际的に体験していく。そしてそれぞれの持つ種目、運動の楽しさにふれていく。Ⅲ期は、いろいろ体験した中で、自分の運動を少し絞って、得意とするような運動を見つけられたら。そしてそういった運動をさらに高められたらという意見が多かったのではないかな。

委員

体を動かすほうの話をまずまとめていく。そしてそのあと体力作りとして、知識関係がどう加わっていくか。今、Ⅱ期、Ⅲ期がたくさん出ているが、Ⅰ期のほうでどうか。

委員

Ⅰ期は、大勢の子が高学年よりも運動に対する意識は本当に力いっぱい楽しく、ただただ体を動かしていれば楽しいという時期。だから指導者の与え方、運動のさせ方がこの時期は大きい。運動嫌いを作ってしまうのは指導者だと思う。指導者側の課題として気になるのは、やはりやみくもにやるのではなく、ねらいを持った授業計画をしないといけない。ルール等を工夫する余地はいっぱいある。

委員

小中の連携があるように、幼稚園・保育園と小学校の接続の部分もあると思う。幼稚園、保育園で、運動経験とか遊びの経験の差が生まれているのではないかと。園の環境や家庭の違いで、経験として差異が随分あるのではないかと。環境面の違いは実際あると思う。

事務局

やはりこのI期でいろいろな動きを体験することが、運動感覚が養われ、後々いろいろな種目につながっていくのではないかと。例えばあまりボールを使わないと、5、6年、中学に入って球技のときにうまくできず、運動嫌いにつながってしまう。今の時代は意図的に学校の中で環境を作り、さまざまな動きを体験させた中から動きの楽しさを味わわせていくことが、非常に大事な要素ではないかと。

委員

幼児期に、いろいろな動きや遊びの中で力をつけていくことが本当に少なくなって、今までそこで身につけていたものがついていない状況だ。生まれてからの運動経験が少ないので、ここで基礎的、基本的な動作を体づくりや遊びの中でやる。低学年でも高学年と同じような指導をする先生がいる。工夫がないと、子どもが苦手意識や嫌いという思いを持つのではないかと。

アドバイザー

最近のI期の子どもたちが昔と比べて変わってきている部分はあるのか。ほかの地域と比べたときに、例えば練馬区の特徴的なこと、あるいは体力的な明確な課題があるのか。

委員

1年生の中でも能力差が明らかにあるという出発点があり、それがだんだん広がっていく。一番顕著なのは水泳で、スイミングに行っている子と行っていない子で、国語の学習で言えば1年生から4年生ぐらいの差がついて同じスタートをする。経済的格差で差が生まれる。そのほかの野球でもサッカー、バレーボールでも、小1から地域のクラブでやっている子も多い。あと非常に感じるのは、いろいろな動きができない。本当に偏った運動しかできない。

委員

あるものに秀でた子が、ほかの運動で「もっとこういうふうにとやったらうまくなるよ」と言っても、「別にいい」と言って意欲を持たない。身体能力ではなく意欲面とか、もっとよりよくなりたいという気持ちにならない子も最近が増えた。二極化とあったが、やっている中にもあって、三極化のようなものがある。やるけれど、これしかやりませんという現象がある。

委員

スポーツクラブに小さな頃からはまって、親の意識もそうで、ファッション的な意識があるのではないかと。生活面でもそういうことに秀でているといじめられない。だから、運動を好きとか自分の体力を伸ばしたいというより、サッカーがすごいと認められているとか、親も子ど

ももすごいと思う面があるので、よからぬ方向に進んでいる部分もある。それを取り戻すために小さな頃からいろいろな動き、運動をさせて、それを楽しいと思わせること。そしてⅡ期でいろいろな運動に触れながら、自分はこれがいいと特性に触れるのが理想の進みだと思う。

委員

特に体力にかかわるところはあまり深入りしないこと。そして目指す児童像のところも今回は身体活動中心になっているので、例えば食育にかかわることや体力の要素を入れて、それを包括するように、もう一度元へ振り返って児童像を考えるのが一つの方法かと思う。

アドバイザー

I期は、体育の授業でもねらっているところが明確だから、そんなに難しくない。課題になるのはⅡ期、Ⅲ期。とりわけⅢ期。それが練馬の小中一貫教育の中で、特に体力向上というねらいから見たときに、どういう具体的な視点や課題があって、それに向けてどんな取り組みがあるのか出せないと、体育の授業の延長だけで終わってしまう。そうすると、指導資料としては少し狭い感じがする。もう少し学校教育全体で、体育以外でどんなことが考えられるか。

委員

身体活動のところは、I期は、力いっぱい運動をする、いろいろな運動経験をさせてあげるというところ。第Ⅱ期は、自分の体に関心を持ってそして計画的にねらいを持って体力作りに取り組む。Ⅲ期だと、自分の体、あるいは生活に応じて自分で課題を持って、具体的な体力作りや体ほぐし、体力を高めることにまともってくるのではないか。あとは、イ、ウ、エ、オに当たる項目を出して、そして次回またI期、Ⅱ期、Ⅲ期でそれぞれ具体的な子ども像を考えてくると、だいたい方向性としてはまともってくるのではないか。

事務局

できれば本日でI期、Ⅱ期、Ⅲ期のキーワードだけでもある程度共通認識をして、今日はその横軸にどういったものが入るかある程度挙げていただく。そして次回、その中にどういう取り組みができるかを持ち寄っていただいて、体系化していくような流れができればいいかと。

目安としては12月に資料が配布になるので、次回9月にはどういったものを資料化していくということがある程度見えておいたほうがいいと思われる。

委員

今日はある程度、身体的な方について結び付けられるかたちになってきたと思う。あと、横軸のア、イに当たるところの意見を出していただきたい。

事務局

この一項目には部活動は入ってくるかなと。I期は特にはないが、課外活動的なこと。

委員

身体的な活動以外で、I期に何ができるか。その期で当てはめられるものを入れていくしか

ない。例えば今、部活動とか課外活動、学校行事は当てはまらない。例えば食育ならば食事のとり方とか、好き嫌いがないようにするとか。Ⅱ期はまた食育か。共通するところと、期に応じた、特色に合うよう何かを当てはめていく。

委員

今食育は練馬区でも全体計画を作ってやっているの、通してできる。これは体力向上に欠かせないので、食育関係は絶対に1本あると思う。あと生活習慣はどう指導するのか。生活指導でもなく難しいが、生活習慣を指導するのは大事なことだと思う。

練馬区としては体力テストを3、4年生でも全部やっている。本校では1、2年生でも体力テストをやって結果を活用しようとしている。3、4年生は業者のデータが来て、自分に何が足りないとか見られる。それをどう生かして指導していくかは指導者の問題なので、Ⅰ期でも関心を持つことはできると思う。

事務局

前回は、体力を机上で学ぶ場も必要ではないかとあった。これを何か表せるキーワードがあればいい。体力を学べる場。自分に関心を持つ。体力テストの結果をふまえて振り返ることも入っていくとも思う。

委員

それはどういう時間でやっているのか。

委員

総合とかで、健康教育でやったことがある。自分たちで親と一緒に体力測定みたいなものを作る。それをもとに、自分で目標を立てたりした。

委員

体育の時間は少ないので難しい。練馬区の取り組みとして体力テストをやるのであれば、それは1年生から自分の体に興味を持ってこういう運動、というのができればいい。

委員

教科、道徳、特別活動などの押さえ方で、体育以外の教科というか、どこにも入らないその他の扱いで行うケースがあったり、あるいは広く体育的活動という範疇の中で扱うことを小学校ではやっている。だから、特別活動の中に入る部分、それから体育以外の活動をうまく住み分けながら、具体的にどんな活動が入るか考えてもいいと思う。

部活動にかかわるところは、小学校だと5年生からクラブ活動がある。特別活動の運動にかかわるところでやっている活動が、Ⅰ期の中にはある。

委員

身体活動の中に、部活動とか課外活動も結果的には含まれている。だからそれ以外を考えると、食育とか学校行事、体力テストの結果をふまえた座学関係。

委員

私が体育の授業として体づくり運動と言っていたのは、Ⅰ期からⅢ期まで通して指導要領でも目玉とされているので、これを系統的に指導することで体力を高めていこうとした。体力の現状を分析して、特化、重点化する体づくり運動の内容を入れようかと思った。例えば1、2年生では投げることに重きを置いた体づくり運動。アには体づくり運動を中心とした、授業としての9年間の取り組みを例として入れて、こういう系統的な指導で練馬区の体力向上を図ろうという一本筋で考えた。イは、食育指導の中でⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の重点などを考えていた。あとは部活動のような課外活動をどうするのか。学校行事をどうするのか。それから、環境整備とか、そんなところはどうか。

事務局

部活動が項目として挙がり、例えばイの部活動、小学校ではクラブ活動としてやられている。だから、クラブ活動と部活動は一つの括りでできる。そして例えばウのところ、学校行事等を通して体力向上を図っていくこともある。あとは縦割りの体育集会等もリンクしてくるのかと。

あとは食育等も含めた、練馬では、健康を維持すること、病気にならないような体力を培うこと等がある。大きな括りとした保健とか保健学習に例えば食育も入るといようなもの。

あとオは、スポーツテストの振り返りなどを少し自由に書けるようなところ。いかがか。

委員

それについて、次回の宿題で、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期に当てはめて考えてくるということで。

事務局

アが体づくり運動、イはクラブ活動・部活動。ウが学校行事、エが保健。オがその他。

中学校の先生は、Ⅱ期、Ⅲ期。小学校の先生は、Ⅰ期、Ⅱ期を中心に。

アドバイザー

ほかの部会の提供いただける資料があれば次回ほしい。

*次回日程：9月25日（金）15：00～ 練馬区役所 東庁舎3階 301号室